

## 乳幼児をもつ母親の育児に対する動機づけと育児行動

Mothers' Motivation for Child-Rearing and parenting behaviors

小林佐知子            中島奈保子            松本麻友子            橘春菜

KOBAYASHI Sachiko, NAKASHIMA Naoko, MATSUMOTO Mayuko, TACHIBANA Haruna

松岡弥玲            杉本英晴            速水敏彦

MATSUOKA Mirei, SUGIMOTO Hideharu, HAYAMIZU Toshihiko

### 【要旨】

乳幼児をもつ母親を対象に、育児に対する動機づけ（以下、育児動機づけとする）と育児行動（世話・相互作用）との関連について検討した。4歳以下の子どもをもつ母親 298 名に、育児動機づけ、育児行動について質問紙調査を実施した。その結果、育児動機づけの3つの下位概念（「見返り期待」・「内的喜び」・「社会的当為」）のうち、「内的喜び」が高いほど育児行動の「相互作用」時間が長かった。また、「社会的当為」が高いほど「世話」行動を担う割合が高かった。子育て自体を楽しむような内発的動機づけが高いほど子どもと関わる時間が長く、育児に関する義務感や責任感が高いほど子どもの世話を多く担っていることが示唆された。「見返り期待」は育児行動と関連しなかった。結果をもとに、動機づけという視点から乳幼児期の子育て支援について考察した。

キーワード：育児動機づけ、育児行動、母親、乳幼児

### 1. はじめに

現代社会では育児は親の当然の責務とみられ、多くの親は当たり前のこととして子どもの世話や遊び相手をする。しかし、中には育児をしようとしなない親も存在する。親が育児をしないことによる問題には、育児放棄など児童虐待に類するものがある。また、児童虐待の予備軍ともいえる放任や、父親が育児に参加しないという問題もある。様相や程度には差があるが、これらの問題に共通するのは親の心が育児に向かっていないということである。「子どもは親が愛情をかけて育てるもの」といった社会通念がある中で、育児に向かわない親の心を深く理解していくことは子育て支援を考える上で重要なことといえる。しかし、虐待などの不適切な養育を引き起こすリスク要因については明らかにされてきているが（岩藤，2008）<sup>2)</sup>、一般的な親を対象にしたものや、育児に向かう（向かわない）心の働きについて検討したものはまだ非常に少なく、不透明である。

育児をする（しない）という行為にはどのような心理プロセスがあるのか。育児を

小林佐知子 中島奈保子 松本麻友子 橘春菜  
松岡弥玲 杉本英晴 速水敏彦

する際の親の心の働きに着目した研究の一つに、育児動機づけに関するものがある。動機づけ (motivation) は簡単に言えば「やる気」であり、行動を生起・維持するための潜在的なエネルギーである。動機づけは認知・感情・欲求の3要素で構成され(上淵, 2004)<sup>3)</sup>, それらが環境要因と相互作用することにより形成される(鹿毛, 2017)<sup>4)</sup>。これまでの動機づけ研究では、教育場面などで報酬や達成目標が明確な行動について取り上げられることが多かったが、最近は日常生活における習慣的な行動に対する動機づけも着目されている(速水, 2012)<sup>5)</sup>。この日常的・習慣的な行動の一つが育児行動である。育児行動は「なぜやるのか」といった意味づけはあまりなされず、当たり前のように繰り返されるものである。従って、なぜ育児行動をするのか(しないのか)という心の働きは、これまでに明らかにされてきた動機づけ過程とはやや異なることが考えられる。

動機づけに関する膨大な数の研究の中で、育児動機づけに関する研究はまだ非常に少ない。乳幼児をもつ親を対象とした中島ら(2015)<sup>6)</sup>は、育児に対する意欲の個人差を動機づけの観点から概念化、尺度化を行った。ここでは、育児動機づけは「見返期待」「内的喜び」「社会的当為」の3要因に分類されることが示されており、これらが育児を行う際の心のエネルギーになると考えられる。「見返期待」は親自身のためになるからという利己的な価値であり、「内的喜び」は子育て自体を楽しむような内発的動機づけ、「社会的当為」は育児に関する義務感や責任感を意味する。ただし、これらが実際の育児行動とどのように関連するのかは不明である。

以上を踏まえ、本研究では乳幼児をもつ親を対象に育児動機づけと育児行動との関連性について検討する。乳幼児期を対象とするのは、育児行動量が最も多く、育児を巡る問題も起きやすい時期と考えられるためである。

## 2. 方法

### 対象と手続き

A・B県内の4歳以下の子どもをもつ母親606名を対象とした。育児動機づけと育児行動および就労状況等について質問紙調査を行った。幼稚園等を通じて質問紙を配布・回収してもらい、349名から回答を得た(回収率57.6%)。このうち、回答に不備がある者と母親以外の回答者を除く298名を分析対象とした。

### 調査内容

**育児動機づけ**：中島ら(2015)<sup>6)</sup>の「子育て動機づけ尺度」22項目を用いた。「見返期待」9項目、「内的喜び」8項目、「社会的当為」5項目の下位尺度から構成される。育児をする理由について、「見返期待」は“自分の老後の面倒をみてもらいたいから”“自分が周りの人にほめられたいので”等、親が育児を見返りが得られる手段として捉えているものである。「内的喜び」は“子どもに接していることが楽しいから”“子育てすること自体が好きだから”等、親が育児自体を楽しんでいるというポジティブ感情を伴うものである。「社会的当為」は“生んだ(生まれた)責任があるから”“世

## 幼児をもつ母親の育児への動機づけと育児行動

話をしなければ子どもは死んでしまうので”等、育児を社会的な責任として捉えているものである。各項目に対し「いつもあてはまる」～「どんなときもあてはまらない」の5件法で尋ねた。

**育児行動：**橋ら (2008)<sup>7)</sup>, Bronte-Tinkew et al. (2007)<sup>8)</sup>, Paulson et al. (2006)<sup>9)</sup>等を参考に10項目を作成した。「世話」6項目(“子どもの食事・ミルクの用意や世話をする”“子どものトイレやおむつの世話をする”“子どものしつけをする”“子どもの着替えをする”“子どもをお風呂に入れる”“子どもを寝かしつける”)と「相互作用」4項目(“子どもの遊び相手をする”“子どもを散歩や公園に連れていく”“子どもに絵本を読み聞かせる”“子どもをあやす(なだめる)”)から構成される。各項目について、1日の中で母親自身が行う平均的な合計時間と、最近1週間の全体量を100%とした場合の母親自身が担う割合を尋ねた。

**その他：**フェイスシートで親の年齢、就業形態、子どもの年齢等について尋ねた。

なお、4歳以下の子どもが複数いる場合は、一番下の子どもについて回答してもらった。

### 倫理的配慮

調査実施時には調査の趣旨と、データは数量化され、統計的に処理されるため個人が特定されないこと、個人情報保護・管理は厳重に行うこと、調査は強制ではなく無理に回答する必要はないこと、途中で回答を中断することができること等を文書にて説明し、同意が得られた人に実施した。本研究は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号14-498)。

## 3. 結果

### (1) 対象者の特徴

対象者の平均年齢は34.8歳(21歳-49歳)、就業形態はフルタイム勤務(派遣社員等含む)38名(12.8%)、パートタイム勤務87名(29.2%)、自営業10名(3.4%)、産休・育児休暇中13名(4.4%)、その他(時短勤務、学生等)9名(3.0%)、専業主婦117名(39.3%)、不明24名(8.1%)であった。調査対象児の年齢は0歳44名(14.8%)、1歳62名(20.8%)、2歳47名(15.8%)、3歳108名(36.2%)、4歳37名(12.4%)であった。

### (2) 各変数の基礎統計量

各変数の平均値等をTable1に示す。育児動機づけの各変数の得点には、3つの下位尺度の項目平均値を用いた。育児行動の時間は、「世話」と「相互作用」それぞれの項目得点の合計値を尺度得点とし、割合はそれぞれの項目平均値を用いた。母親が1日の中で行う「世話」時間は平均302分(約5時間)、「相互作用」時間は平均210分(3時間半)であった。割合をみると、「世話」で約7割、「相互作用」で約6割を母親が行っていた。いずれも個人差が大きいことが示唆された。

小林佐知子 中島奈保子 松本麻友子 橘春菜  
 松岡弥玲 杉本英晴 速水敏彦

Table1 各変数の基礎統計量

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
育児動機づけ				
見返り期待	2.15	0.64	1.00	4.44
内的喜び	4.05	0.50	2.50	5.00
社会的当為	3.70	0.80	1.00	5.00
育児行動				
世話時間(分)	302.39	180.13	68.00	1150.00
相互作用時間(分)	210.41	152.51	20.00	1090.00
世話割合(%)	72.65	21.78	5.50	100.00
相互作用割合(%)	62.15	25.04	2.50	100.00

$n=298$

### (3) 対象児の年齢と母親の就労による育児行動の違い

子どもの年齢や母親の就労の有無によって育児行動量が異なることが予想される。子どもの年齢が3歳未満を年齢低群 ( $n = 153$ ), 3歳以上を年齢高群 ( $n = 145$ ) として育児行動量を比較したところ, 育児行動の時間に差がみられた (Table2)。対象児が3歳未満の場合は3歳以上に比べて育児行動の時間が長かったが, 割合には差がみられなかった。

次に, 母親の有職・無職による育児行動量の違いを調べた。就労が不明の24名を除き, 就業形態に関わらず何らかの仕事をもつ母親を有職群 ( $n = 157$ ), 他方を専業主婦群 ( $n = 117$ ) として育児行動量を比較した結果, 育児行動時間の相互作用と割合に差がみられた (Table2)。有職群に比べて専業主婦群の方が相互作用の時間が長く, 育児行動を担う割合も高かった。ただし, 世話時間には差がみられなかった。

Table2 対象児の年齢と母親の就労による育児行動の差異

	対象児の年齢別		t値	母親の就労別		t値
	平均値(標準偏差)			平均値(標準偏差)		
	年齢低群	年齢高群		有職群	専業主婦群	
育児行動						
世話時間(分)	336.4 (186.7)	267.4 (166.6)	-3.2**	286.8 (181.1)	322.8 (183.3)	1.5
相互作用時間(分)	255.3 (171.1)	164.9 (114.8)	-5.2***	187.2 (139.8)	238.3 (166.6)	2.7**
世話割合(%)	74.2 (21.4)	70.9 (22.2)	-1.2	69.5 (22.1)	76.1 (21.3)	2.3*
相互作用割合(%)	63.7 (23.6)	60.3 (26.7)	-1.1	56.5 (25.3)	70.0 (22.8)	4.3***

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

### (4) 育児動機づけと育児行動との関連

対象児の年齢と母親の就労を統制した上で, 育児動機づけの3要因と育児行動との偏相関を調べた (Table3)。その結果, 内的喜びと相互作用時間との間に正の関連, 社

幼児をもつ母親の育児への動機づけと育児行動

会的当為と世話割合との間に正の関連が示された。内的喜びが高いほど子どもと関わる時間が長く、社会的当為が高いほど子どもの世話を担う割合が高くなることが示唆された。見返り期待と育児行動は関連しなかった。

Table3 育児動機づけと育児行動の偏相関

	時間 (世話)	時間 (相互作用)	割合 (世話)	割合 (相互作用)
見返り期待	.08	-.02	.02	.03
内的喜び	.07	.14*	.09	.05
社会的当為	.13	.11	.18*	.13 <sup>†</sup>

\* $p < .05$  <sup>†</sup> $p < .10$

#### 4. 考 察

本研究は乳幼児をもつ母親を対象に、育児動機づけと育児行動（世話・相互作用）との関連について検討するものであった。

育児行動に対する対象児の年齢と母親の就労による差異を調べたところ、3歳未満の子どもをもつ母親は、3歳以上の子どもをもつ母親に比べて一日の育児行動の時間が長かった。本研究での育児行動は「世話」と「相互作用」から構成されるが、いずれも同じ結果であった。子どもの年齢が低い場合に育児行動量が多いことは当然の結果といえよう。他方、育児行動を母親が担う割合には差がみられず、乳幼児期を通じて多くの母親が全体の6~7割を行っていた。就労の有無による育児行動の差をみると、「世話」時間には差がみられないが、「相互作用」時間や「世話」割合、「相互作用」割合において専業主婦群の方が有職群に比べて高かった。就労の有無に関わらず子どもの日常的なケアにかかる時間には差がないが、子どもとの遊びや絵本の読み聞かせ等の時間は働く母親の方が少ない様子である。

以上を踏まえ、対象児の年齢と母親の就労の有無を統制した上で、育児動機づけと育児行動との関連を調べたところ、育児動機づけの3つの下位概念のうち、「内的喜び」と「社会的当為」に関連性が示された。内的喜びが高いほど相互作用時間が長いことから、“子どもと接することが楽しい”“子育てが好き”“子どもがかわいい”等の子どもや育児に対してポジティブな感情を伴う内発的動機づけをもつ人ほど子どもと関わる時間が長くなることが示唆される。つまり、子どもと遊んだり絵本を読む際のエネルギーとなるのは子どもや育児に対するポジティブな認知や感情であるといえる。他方、社会的当為が高いほど子どもの世話の割合が高いことから、育児への責任感や義務感は、母親自身が多くの育児行動を担うように背中を押しているといえる。育児を自分で担おうとする母親の内面では、こうした“自分がやらなければ”という心性が働いている様子である。なお、「見返り期待」は育児行動とは関連がみられず、老後のためや他者からの評価を得るためといった親自身の利己的な目的によるやる気は、実

小林佐知子 中島奈保子 松本麻友子 橘春菜  
 松岡弥玲 杉本英晴 速水敏彦

際の育児行動の発現には影響しないことが示唆される。

本研究の結果を子育て支援の視点からみると、育児に楽しさを見出せず、子どもや育児に対してポジティブな認知・感情を持ってない親は注意が必要である。育児にやる気が出る時・出ない時について自由記述をカテゴリー化した Tachibana et al. (2016)<sup>10)</sup>では、やる気が出るのは「子どもの笑顔や寝顔」「子どもの成長」といった子ども側の要因の他、親側の要因として「子どもを喜ばせたい」「心理的余裕」および「他者の影響・サポート」が挙げられている。また、やる気が出ないのは子どもが「コントロール不能」である場合の他、親自身の「心身の疲れ」「時間的余裕のなさ」、他者からの「理解・サポートのなさ」が挙げられた。子どもから離れる時間や休息する時間、サポートの獲得が必要といえる。他方、育児への責任感や義務感を強く感じる母親ほど育児を負担する割合が高かったことは、それを促進する社会にも目を向ける必要がある。本邦では父親の育児を勧奨する様々な方策が思案されてきたが、父親の育児参加は十分とはいえないのが現状である（増井，2017）<sup>11)</sup>。依然として母親に育児負担が偏る一因には、母親自身が“自分が生んだ責任があるから”と考える傾向があるためといえる。背景には、育児は母親の当然の義務であるという社会通念があり（山田，1999）<sup>12)</sup>、母親にとってプレッシャーになっていることもあるといえよう。

## 5. 今後の課題

本研究は「なぜ育児をするのか」という動機づけの認知成分を中心に検討したが、日常的・習慣的に行われる行動は意識されずに行われることが多い。今後は非意識的な部分にも着目していく必要がある。また、父親と母親とでは育児行動量の差が大きく、育児行動の内容にも差があることから（高岡，2017）<sup>13)</sup>動機づけ過程にも性差があることが考えられる。今後は父親を対象とした検討も必要と考えられる。

## 文 献

- 1) 加藤尚子 (2011) 親に放任されている子 児童心理, 65(7), 594-599.
- 2) 岩藤裕美 (2008) 虐待の可能性とその防止への援助 無藤隆・安藤智子 (編) 子育て支援の心理学：家庭・園・地域で育てる 有斐閣 55-69.
- 3) 上淵 寿 (2004) 動機づけ研究の最前線 北大路書房.
- 4) 鹿毛雅治 (2017) “成らぬは人の為ぎぬなりけり：モチベーション” 鹿毛雅治 (編) パフォーマンスがわかる 12 の理論：「クリエイティブに生きるための心理学」入門！ 33-61. 金剛出版
- 5) 速水敏彦 (2012) 感情的動機づけ理論の展開：やる気の素顔 ナカニシヤ出版
- 6) 中島奈保子・松本麻友子・橘春菜・小林佐知子・松岡弥玲・杉本英晴・速水敏彦 (2015) 子育て動機づけ尺度の構成 日本発達心理学会第 26 回大会論文集, P3-84.
- 7) 橘 千恵・中村絵里子・中島夕美・石田貞代・萩原結花 (2008) 夫の家事育児

## 幼児をもつ母親の育児への動機づけと育児行動

- 行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足度との関連: 妻との比較 母性衛生, 49(1), 65-73.
- 8) Bronte-Tinkew, J., Ryan, S., Carrano, J., & Moore K.A. (2007) Resident fathers' pregnancy intentions, prenatal behaviors, and links to involvement with infants. *Journal of Marriage and Family*, 69(4), 977-990.
  - 9) Paulson, J.F. Dauber, S., & Leiferman, J.A. (2006) Individual and combined effects of postpartum depression in mothers and fathers on parenting behavior. *Pediatrics*, 118(21), 659-667.
  - 10) Tachibana H., Nakashima N., Matsumoto M., Kobayashi S., Matsuoka M., Sugimoto H., & Hayamizu T. (2016) Mothers' Motivation for Child-Rearing Investigated using the free description method. The 31st international congress of psychology.
  - 11) 増井秀樹 (2017) わが国における父親の子育ての現状 別冊発達33, 20-23.
  - 12) 山田昌弘 (1999) 現代社会における子育ての「意味」の危機 家族社会学研究, 11, 49-57.
  - 13) 高岡順子 (2017) 平成の父親の子育て意識・実態の変化 別冊発達33, 24-29.

(2018年12月11日受理)